特別連載　アジ研の50年と途上国研究

第10回　図書館と調査研究

――鳥の両翼，車の両輪――

松本脩作（まつもとしゅうさく）

はしがき

松本脩作氏は，1960年にアジア経済研究所（以下，アジ研）に入所し，2000年3月に定年退職されるまで，40年にわたってライブラリアンとして図書館（1997年に図書資料部から図書館に組織改変）に勤務された。その間，1969年から2年間インドに，また1989年から2年間英国に海外研究員として赴任し，インド，あるいは途上国関係資料の書誌的研究を行った。

在職期間中には，途上国全地域にわたって精力的に資料の選書・収集を行っているが，特にアジ研の南アジア関係資料のコレクションをSOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）図書館の南アジアコレクションに勝るとも劣らないものに発展させた功績は，松本氏によるところが大きい。アジ研退職後は，東京外国語大学の「21世紀COE『史資料ハブ地域文化研究拠点』」プロジェクトに参加され，南アジア関連の史資料収集のアドバイザーとして活躍されるとともに，『インド書誌――明治初期～2000年刊行邦文単行書――』を編纂された。現在は，大東文化大学非常勤講師としてライブラリアンの育成にあたられている。

このインタビューは，2009年10月19日にジェトロ会館で行った。松本氏には，アジ研図書館の創設期に示された途上国資料・情報センターとしての方向性やライブラリアンの育成方針から，松本氏ご自身が担当された資料収集や資料サービス，書誌活動，また，在職中の図書館業務全般についていろいろお話をいただいた。さらに，傑出したライブラリアンであった中村弘光氏（のちに八千代国際［現秀明］大学教授，故人）のお仕事ぶりなどについてもうかがった。

参加者は，泉沢久美子，高橋理枝，岸真由美，坂井華奈子で，インタビューの整理・編集はおもに泉沢が行った。

（アジア経済研究所研究支援部・泉沢久美子）

Ⅰ　アジ研図書館の創設期

――開かれた資料センターをめざす――

――まず，松本さんが入所されたころのアジ研図書資料部（現在の図書館）についてお話いただけますか。そもそもどんな動機からアジ研に就職されたのですか。

松本　私は文部省図書館職員養成所というところで2年間勉強をしていて，卒業の前に「今度新しい図書館ができた」という話を聞いて，これまでのしがらみのない図書館で新しいことを自由にやれそうだと考え採用試験を受けてみたのです。大学図書館とか国会図書館とか企業の専門図書館とか，いろいろな種類の図書館があったのですけれども，既存の図書館にはそれなりの制約があったので，「新しくて，これから出発するという図書館だとおもしろいかな」と思ったのです。アジ研が財団法人として1958年秋ごろに設立されて，図書館ができたのが翌年の1959年の6月くらいだと思いますが，まだできたばかりの1960年4月入所ということで採用されました。その年は，同じ養成所から原田忠夫さんと花房征夫さんと私の3人が入っています。

当時のアジ研はまだ財団法人でした。東京駅丸の内北口から徒歩数分の新大手町ビルにオフィスがあって，図書館のことを「図書資料部」といっておりましたが，まだこれから公開できるような図書館を準備中という状況でした。図書館として閲覧室があるような状況ではなかったのです。書庫が地下2階にあって，4階のオフィスで本をどんどん受入れて処理し，調査研究部門の職員には地下2階の書庫のなかで本をみていただくといった感じでした。

――当時の図書資料部の組織，雰囲気はどんな感じでしたか。

松本　図書資料部の雰囲気は，当初から「後進国（当時のことばで）問題に関する日本の資料センター」を作るということが一致した目標であったように思います。アジ研は日本における途上国研究のセンターであり，図書資料部はその資料センターだという位置づけでした。まだ図書資料部というだけで課も何もない。大きなグループとして，収集グループと整理グループ，雑誌記事索引採録グループ，庶務グループ，それにマイクロ室準備のために平川栄一さんがおられました。そのころは岸幸一さんという国会図書館から移られた方が初代部長でした。アジ研図書館に「岸幸一コレクション――南方関係軍政・海軍資料――」を残された方で，インドネシア研究者としても著名な方でした。阪田貞宣さんが管理職で，石井一郎さんや萩原宜之さんたちがいらっしゃいました。私が入ったころは10数人，20人はいなかったと思います。どんどん人を採用していって，あっという間に増えたという感じでした。

松本脩作氏

入ってしばらくして非常に印象的なことがありました。所長の東畑精一先生がお昼になると，新大手町ビルにある「宮川」という鰻屋に，2～3人ずつ新入職員を呼ばれていっしょに昼食を取られるのです。ウナ重を食べながらいろいろとお話をなさるわけです。そのときにおっ

しゃったことは「この研究所は調査研究と図書館が車の両輪だ。どちらかがこけてもおかしくなるので，支えてほしい，頑張ってくれ」と。それから「図書館というのは途上国研究の，ある意味では縁の下の土台。これがうまくできていないと研究自体が進まない」ともおっしゃいました。日本における途上国研究のためのインフラストラクチャーを構築するようにというような意味だったと思います。それが非常に印象的でした。

初期は新しい専門図書館の蔵書を構築するための基礎作業の期間でもありましたから，短期間に大量の資料を収集しました。途上国研究のためのレファレンス用の必要な資料として，辞書・事典類，年鑑，人名録，便覧，統計書，雑誌のバックナンバーなどを収集しました。同時に過去と同時代の途上国研究の成果を，国内と海外の出版物から並行して集めました。国内の書店ばかりでなく，海外の書店からもカタログが送られてきて，大量の資料が入ってきました。こちらから注文したものが届けられるばかりでなく，「見計らい」と我々はいっていましたが，書店からこれはどうですか，という感じで相当の量の新本・古本がもちこまれました。この見計らいの資料を買うか買わないかの判断は岸部長が決められるのですが，私がブックトラックの上にオファーされた資料を並べておみせするとほとんど即座に採否を判断なさるので，仕事がとても速く進んでやりやすかった。資料のことを非常によくご存知で決断が速い方という印象でした。

世界各地のいろいろな言語の出版物が入ってきました。英語，フランス語，ドイツ語，ロシア語など先進国の資料と，中国語，インドネシア語，マレー語，タイ語，アラビア語，ペルシャ語など途上国・現地の言語資料がありました。研究部門の方などを含めるとこれらの言語をわかる方が誰かアジ研内におられました。それに概してそれらの言語ができる方が入手された資料が多かったので，受入れ原簿への登録，カード作成，分類などの図書館内の作業に協力していただくこともありました。最初のころはこれらの多種多様な資料がどんどん入ってきて，事務室のなかに用意されていた書架には本がいっぱいになり，もちこまれた本の置き場所がなくて，床の上に新聞紙を拡げてその上に本を積んだことがしばしばでした。図書館員はいつもスペースの問題で悩まされますが，創立のころから早々とこの問題に直面しました。

集められた資料は社会科学の諸分野，政治・経済・社会を中心とする専門主題に関するものがほとんどでしたので，カバーすべき主題分野についての勉強が必要でした。それに世界各地の言語で書かれた出版物が多いので，この図書館には諸言語を理解できる人材が不可欠であることが当初から明白でした。

このような図書館の独自の特徴が当初から意識されていましたので，図書館員のなかで，地域・主題・言語などによる分業，そのための人材養成（トレーニング）の必要性は，初期の段階からいろいろと議論もされ，具体的な方策もとられていました。私も入所してごく早い時期にベンガル語の研修を受けました。アジ研での仕事を終えてから所外で行われていた夏季入門コースに通うという形でした。残念ながら私の能力不足でついにものになりませんでした。

――その当時はどうやって途上国の現地資料を

集めていたのですか。

松本　私の場合，入ってすぐ，「収集担当として洋書の受け入れを全部やるように」といわれました。最初の4年間洋書の収集ばかりやっていました。創立の時期ですから，当時としては資料購入予算が潤沢にあったと思います。資料収集で一番特徴があったのは，外国からかなりの量の現地資料や先進国の古書店などから直接資料を輸入していることでした。国内の書籍輸入書店を経由せず，図書館が直接取引を行い外貨で支払ったり，現地資料収集の際に外貨を携行したりする必要があったので，アジ研については外貨規制を非常に緩やかにしてくれたのです。当時は外貨を送金したり，海外に外貨を携行する際はいちいち日銀に許可をもらう必要があったのですが，非常にスムーズに許可してくれる状況にありました。現地に資料収集のチームを派遣するような場合に，まとまった外貨をもっていくのは，当時大変だったのですけれども，アジ研の場合は例外なく許可してくれたように記憶しています。アジ研職員一人と大学の先生とか外部の方を入れたチームを作って，資料収集に出かけるのが普通のやり方でした。

また海外の新刊書店，古書店，政府機関，研究機関などに直接注文を出し書物が到着すれば外貨で支払いをするということもやりましたので，まるで書籍輸入商のようなことも仕事の一部でした。特に海外の意欲のある古書店などは，こちらが黙っていてもどこからかアジ研図書館は今熱心に収集しているようだといった情報が入るのか，先方からリストを送ってきてくれることが多かったと記憶しています。そのようなオファーには素早く反応するのが大事だと，体験的に学びました。そういう予算の使い方ができるのは，当時の研究機関としてはほんとうに珍しかったと思います。

今でも普通，国公立大学の図書館では国内の本屋さんを通さないと外国から本を輸入できないでしょう。ところがアジ研の場合は，最初からそれが許されていますから，直接取引をやっていました。

そういった現地の資料収集チームや海外出張者が買ってくる本，国内の書店さんが持ち込む本，それと海外派遣員が送ってくる本，海外書店などから送られてくる本を全部，最初のころは私一人で受け入れていたのです。まず，領収書と現物と合わせて10冊単位1枚の原簿にタイプで打ち込んでいくのです。そして蔵書印を押して整理担当者へ回す。相当の仕事量で，毎日残業という感じでした。これが4年ぐらい続きましたが，いろいろな国から資料が入ってきて非常におもしろかった。

外国にそう簡単に行けない時代でしたから，海外出張に行って，しかも本を買って持って帰ってくるということ自体が大変な仕事だったわけですが，ともかく研究者も「資料を確保することが先決」という感じでした。ほんとうに資料に渇望しているというような状況だったと思うのです。それは戦後の非常に貧しい状況からまだ脱却できるか，できないかという時期だったからでしょう。それともうひとつは，日本の外国研究が一度，第二次世界大戦で壊れてしまった。施設も人も組織も壊れた。そして長い間，その再建ができなかったので，ひとつのモデルとしては，「満鉄調査部」というのがイメージのなかにあったと思います。満鉄調査部の再来というか，そういうのを目指しているの

では，とけっこうあちこちでいわれていました。ある意味では政府のバックがあって，もう一度システマティックな外国研究に取り組み，アジア研究を再構築するという位置づけだったと思います。当時は，やはり周辺のアジア諸国でかなり厳しい反日の雰囲気がありました。僕なんかはまだ若造でしたけれども，そういう点ではやはり非常に気を使っていました。

――創立当初から資料センターとして「公開」が原則となっていましたが，当時の専門図書館としては珍しかったのではないですか。

松本　この点に関して我々はかなり意識的だったのです。「資料センターというからには誰に対しても公開していなくてはならない」という問題意識というのは，最初からかなりありました。実は，1961年12月に，突然アジ研のなかの組織替えがありまして，調査研究第一部と第二部ができました。それで図書資料部長だった岸さんが，第二部の部長になられました。それにともなって，外国雑誌記事索引の担当者全員とその後研究者になる方々が図書資料部から多数そちらに異動したのです。同時に図書館が受け入れているいろいろな資料のなかで，雑誌だけは資料部から切り離されて調査研究第二部に移ったわけです。研究者が最新の雑誌に目を通し索引作業もやることによって，研究の足許を固めようというような目的があったのでしょう。それから2年ぐらい図書館に雑誌がなくて公開できない状況になり，非常に物議をかもしました。その後また組織変更があって，雑誌は資料部に帰ってきたのです（笑）。初期に，そういう混乱した時期があったのです。

そのころに一方で，「働きやすい職場にしてほしい」，それから「残業を減らしてほしい」というようなこともあって労働組合が結成されました。私は組合を作る側の一員でしたが，そのときに図書資料部の組合部会が打ち出したのは，「自主・民主・公開」ということなのです。自主的な運営と民主的な運営，そして公開をちゃんとやろうということです。我々はそのころ公開は大切だと思っていました。1960年7月からはアジ研はそれまでの財団法人から国会で承認されたアジア経済研究所法にもとづく特殊法人になりましたし，人件費予算は全額国庫補助といって国民の税金で賄われているわけですから，公開は当然のことです。それは納税者に対する当然の義務ということで，アジ研側からもそれに反対するような動きはなかったように記憶しています。

II　専門ライブラリアンの確保と図書館体制の確立

――専門図書館として一からスタートするにあたり，優秀なライブラリアンを外から引き抜いてきたのですか。

松本　そうです。当時はやはり目立った方をアジ研が引っこ抜いたようです。国会図書館から岸幸一さん，坂田貞宜さん，櫻井謙悦さん，松谷賢次郎さん，平川栄一さんなどがおみえになり，東大社研から萩原宜之さん，それに石井一郎さんなどがごく初期の主要メンバーでおられました。その後我々のような新卒者が数次にわたって採用され，さらに中村弘光さんと加藤昭雄さんが国会図書館から移ってこられたのです。

それから三菱経済研究所から原田義信さんがおみえになりました。

当時はやはりプロ集団がトップに必要だったということでしょう。日本における途上国資料センターとしてのグランド・デザインは，私が採用される以前のごく初期に基本はそれらの人々の構想によってできあがっていたのではないかと思います。もちろん時間の経過とともに事業の内容・やり方は変化していったのですが，資料収集，整理，各種情報サービスの骨組みは明確にあったように思います。時代の先端を行く構想力という点では，これら諸先輩の残されたものが非常に大きかったと思います。

資料収集の面では，現地および現地語出版物，先進国・国際機関の出版物，国内出版物の包括的収集，海外・現地の新聞・雑誌の収集と，海外研究機関との資料交換，統計，地図，法令などの収集というところに特徴があったと思います。

整理部門では，最初から国際十進分類法（UDC）の地域分類に着目してアジ研独自の改良版分類表の方向を定めたこと，それにともないカード作成枚数を当時の図書館としては異例の多数作成し，複数の著者・書名・主題・地域からアプローチできるようなカード・システムを設計したこと，各種言語資料によるカードをインターファイルするシステムを目指したこと，整理済みのカードを原稿にして月単位で編集した『資料月報』と『外国雑誌記事索引』を刊行し，その累積版を年単位で『蔵書目録』として公刊するシステムを設計したこと，など当時の図書館界ではかなり先進的な構想であったと思います。最初の段階では坂田貞宜さんや櫻井謙悦さんがこれらの仕事にかかわられ，その後加藤昭雄さんが当初からの基本構想を発展させたという流れがあったように理解しています。

情報サービスの面では，設立初期から『雑誌記事索引』や『資料月報』を公刊することによって，近着の各種情報を広く発信することに重点がおかれていました。また「現代中国」，「旧植民地・満鉄」，「タイ語文献」などの総合目録編纂事業やそれに関係するヒアリング調査なども進められました。新大手町ビル時代はスペースがなくて閲覧サービスやレファレンス・サービスをほとんど行っていませんでしたが，1963年に市谷本村町のビルに移転してからは収集・整理・参考の三課体制が作られました。マイクロ室もつくられマイクロ資料の撮影・閲覧も本格的にはじめられ，閲覧室の拡充や，かなり後になりますが，「資料情報相談室」の設置による対外的なレファレンス・サービスも軌道にのりました。

そして，どんどん職員が増えていきました。初期には図書館は100人体制を目指すといわれていましたが，そこまでは到達できませんでした。しかし一時は40人近くの図書館職員がいたと思います。

このように大きな構想が設立の初期からあり，先見性のある諸先輩が創立期に多くおられて基礎をつくられたと理解しています。そのなかで特に中村さんは優れたブックマンで，あの方の収集努力の成果が今の蔵書の根幹をなしているといっても良いかもしれません。

III 「エリア・ライブラリアン」の育成と海外派遣制度

――図書館職員が「担当地域」をもつという制

度，アジ研では「エリア・ライブラリアン」と呼んでいますが，このような制度は初めからあったのですか。どのようにして育成したのですか。

松本　当初からかなり明確なポリシーとしてありました。それはやはり，途上国資料センターをつくるために，地域担当のライブラリアンを育成・配置するということです。そして現地語研修も普通の研修の一部として行われていました。所内コースと所外コースとがあり，所内コースは所外の大学の先生などに一定期間決まった時間にアジ研に来ていただくという制度で，入門的なレベルから中級・上級という段階があったように記憶しています。所外コースは所外の既存語学コースを利用していました。図書館員は，非常に大きな地域や特定の国を担当して主要な言語の訓練を受け，レファレンスがきた場合には回答する責任をもつというのが骨子でした。できるだけ多くの人が地域を担当することが期待されていました。中国とか朝鮮半島は，日本にとって地理的な関係もあり非常に大きな対象でしたし，東南アジアについては言語的な多様性があり担当もいくつかに分かれていて，南アジア，中東，アフリカはそれぞれひとつのグループでした。そしてラテンアメリカやオセアニアがつけ加わってきて，その後に東欧も入ってきました。アジ研の守備範囲が地域的に広がるにつれて，図書館もその地域の要員をつくるという努力，これはもうずっとありました。そして，その地域担当スタッフは，調査研究部門がもっている研究プロジェクトや研究会のなかに必ず入れということでした。研究者と図書館の地域担当者を含めてインドグループとか南アジアグループという言い方をよくしていたのですけれども，そのグループはしょっちゅう会っていました。そして，今度どういう研究をやるとか，誰が何をやっているかとか。

この調査部門の人たちとの交流・情報交換は図書資料部としてかなり意識的にやっていました。自分が担当する地域の研究会に入ることの意味は，まず研究者との間のコミュニケーションがよくなる。なにを研究者が今やろうとしているか，そのために必要な資料はなにかということも，かなりわかるわけです。調査研究のための資料を把握するのに非常に良い機会でしたし，もちろん研究会が発足する際に，「こういう資料がどうしても要るから手に入れてくれ」というようなこともあるわけです。そうするとこちらも最善を尽くして集めたいと思うわけで，資料部に持ち帰って「これをどうしても入れてください」というようにやっていました。

もうひとつ研究会のいいところは，委員会のメンバーは所内の研究員だけではないのです。外部研究員が必ず入っているわけです。それは大学の先生だったり，企業の調査マン，研究機関やマスコミの人，場合によっては官庁の職員も入っていたりする。そういうグループが1年ないし2年のプロジェクトをつくって，本をつくっていくということをやるわけです。そうすると，自分が担当する地域について外部にどういう研究者がいるか，彼らの資料に対する要求がわかるわけです。労せずして外からの資料に対する要求がキャッチできます。これは非常に大きい利点です。この資料は急いで買わなくてはいけない，そういうことがよくわかってくる。図書館で何となくやっていると，潜在的な需要をキャッチすることは難しいと思うのです。な

かなか具体的な情報ニーズとしてつかみにくい。だから，私は今でもできるだけ図書館の地域担当者は研究会に入ったほうがいいと思います。研究会の一員として原稿執筆の義務を負うか負わないかは，むしろマイナーなことです。最初は原稿義務などを負うような力がないのはわかっていますから，それは力をつけていって，だんだんと原稿義務を背負っていくという段階を踏むことが必要になると思いますけれども。他の図書館では，こういった形で研究者と図書館員が交流しコミュニケーションをもつ機会はなかなかないと思います。

――ライブラリアンの海外派遣制度も早くからあったようですが，松本さんがインドに行かれたのはいつ頃ですか。

松本　私は1969年3月～1971年3月の2年間，ニューデリーのインド行政研究所（Indian Institute of Public Administration）におりました。インドを担当したのは，かなり偶然といいますか，1966年4月から「君はインド担当だ」といわれたのです。それまではまだ，どこの地域担当とも決まっていなくて，整理課で『資料月報』や『蔵書目録』の編集などをやっていたのです。実は濱口恒夫さんが参考課でインド・南アジアを担当していたのですが，大阪外国語大学から呼び戻されて先生になることになり，南アジア担当者がポンと空いてしまったのです(笑)。それで「じゃ，おまえがやれ」ということになりました。まったくの偶然による身のふり方決定というわけです。

図書館のメンバーで最初に海外派遣員になられたのは松谷賢次郎さんです。インド・カルカッタのインド統計研究所へ行かれました。やはり東畑先生が「車の両輪」といっておられたので，図書館員を外国へ出して勉強の機会を与えて訓練するということは，初期からの方針でした。私も，この海外派遣員制度の何度目かの人間として出たのですけれど，非常に勉強になりました。特に，我々がカバーするArea Studiesという分野で，それにかかわっていく図書館員として〝Area Librarian″とか，〝Area Studies Librarian″というのをつくっていこうというのは非常にいい制度です。日本で資料だけみて想像しているのと，実際の現地の状況というのはかなり違うことがわかりました。特に，インドへ行き現実に直面するにつれ，行く前にもっていた自分の認識の浅さを痛感させられました。向こうに行くと，ある研究機関に属して勉強するわけですが，そこを起点にして，いろいろな研究機関を訪ねる，それから図書館を訪ねる。そういうところで人のコネクションができてくる。そうすると資料の状態が非常によくみえてくるところがあります。それから，今彼らはどういうことを研究したがっているか，どういうことを問題にしているかということがビビッドにわかるわけです。

私が行った1969年は，1947年のインド独立後，どういう経済システムをつくっていこうかということで経済計画に大きな期待がかけられ大いなる希望のもとに推進されてきたのですが，そろそろ問題点がいろいろと出てきて従来の路線を再検討しなければならないことが明らかになりつつある時期でした。第1次，第2次の経済開発5カ年計画をずっと実施してきて，第3次計画に入るとそれが頓挫しはじめたという時期なのです。どうもうまくいかないということ

が，かなり明瞭に出てきて，「経済計画だけでやっていけるのか」というような時期だったと思います。それで，中央政府や，各州政府がもっているポリシーがあるわけですが，この経済計画に関する資料だけでも膨大なものになるのです。それをなんとか集めなくてはいけないということで，各州の州都をかなり回って資料を集めました。結局2年間では全州都を回り切れませんでした。

政府関係資料というのは，特に経済をやっていく場合には非常に大事なのです。何かを調べる場合，基礎的なデータになるのはやはり政府がもっているデータです。これはきちっと押さえていかなくてはいけない。それは中央政府レベル，州政府レベルにおいてもしかりです。そのころはインドでは経済開発関係の研究機関が州レベルであちこちにできてきていましたので，かなりそういうところを訪ねました。そうすると，各州における問題意識が非常によくわかる。それから，そういう研究機関がつくっている資料を購入したり，場合によっては資料の国際交換にのせることをやりました。

そのほかに，たとえば日本の経団連にあたるような全国規模の経済団体や各地の商工会議所があるわけですが，そこがどういう調査をやっているか，どういう出版物をもっているのか，やはり調査する必要がある。各地の商工会議所も現地に訪ねてみると，いろいろ出版物が出てくる。古い資料も集めなくてはいけないということがわかる。そして，現地の出版事情とか，新刊書店，古書店がどういう状況にあるかというのがよくわかりました。やはり2年またはそれ以上の現地留学経験があるというのは，その後の仕事に大変役立ちました。

――では，現地に行かれて，資料収集のポイントのようなものを身につけたということですか。

松本　インドは大きな国ですから，中央政府の出版物以外に州政府の出版物がかなりありますし，研究機関の出版物もある。ニューデリーの本屋さんに頼んでも，ニューデリー以外の場所で出版された資料はなかなか集まらないです。出版物流通のための全国のネットワークが全然できていないわけです。日本にいてニューデリーの本屋さんとか，カルカッタの本屋さん，ボンベイの本屋さんに頼んでも，その都市以外の出版物はほとんど来ないわけです。ですから直接各地に行って集めるしかない。そのほかにも考慮しなくてはならない要因がいろいろとありました。地方の州政府出版物センターへ行き，出版物をニューデリーの私宛に送るよう依頼したのですが，ある日ニューデリー駅近くの税務署から出頭せよとの連絡がきました。何事かと思い出頭すると，州政府出版物が鉄道便で送られてきている，入市税（Octroi）を支払って荷物を引き取れ，というわけです。オクトロイという税金が今でも生きていることを知りました。もし州政府出版物が郵便局を経由してブック・ポスト（書籍小包）で送られていれば，送料以外の税金はかからないのですが，送り方の違いで一昔前のものと思っていた税金を払わなければなりません。これには驚きました。

州政府出版物センターにも州によっていろいろな特徴がありました。植民地時代にイギリスの直轄地であった州と藩王国であった州では，ビジネスのやり方にかなりの違いがありました。旧藩王国では概して物事がビジネスライクには進まない。封建的な行政事務の進め方がまだ

残っている感じがありました。それも各地でまちまちなやり方です。こちらも最初は非常に気を遣いました。

地方で入手した資料をブック・ポストでニューデリーや東京宛に送る際の手間も相当なものです。その日に収集した資料のリストをつくって梱包して，翌日近くの郵便局に行き発送するのですが，3キログラムを超えると受け付けてくれないので，経験的に重量を覚えて一包ずつ梱包作業をしていると深夜になることもありました。本は重いので郵便局へ運ぶのが大変です。郵便局がまた難物で大変な時間をかけて受け付け完了まで辛抱強く土地の流儀で仕事をやりおおせなくてはなりません。このようにインフラの問題や各地の状況による要因などが重なって資料収集も一筋縄ではやれないことが体験的にわかってきました。

その後，本の流通事情は時間の経過とともにだんだんと改善されているようですので，今では相当に変化しているでしょう。インドは広大な国ですから，ローカルカラーもさまざまで戸惑うことも多いのですが，逆にその多様性がおもしろいのも事実です。

Ⅳ　中村弘光氏

――ブックマン，レファレンサーのプロ――

――中村弘光さんは蔵書構築の面で多大な貢献をされただけでなく，優秀なレファレンサーとして研究者の方々にも伝説的に語られています。中村さんについてお話していただけますか。

松本　図書館というのは組織で仕事をするところで，いろいろな種類の仕事が数多くあり，それぞれの仕事に才能を発揮する多様な個人の集団ということができると思います。収集，整理，閲覧，レファレンスなど多くの仕事があり，その上アジ研図書館の場合は担当地域や言語の問題や書誌・目録編纂まで関係してきますから，各々の現場に多才で個性的なライブラリアンが多くいました。そのなかでも中村さんはひときわ目立つ方でした。

中村さんは国会図書館で優秀なレファレンス・ライブラリアンとしての実績をかわれて招聘されたのだと思います。1962年6月に入所してこられましたが，レファレンス・サービスや書誌活動を今後どのように展開するか，という課題をになう中心的役割を期待されていたのだと理解していました。1985年3月末に退職され，秀明大学（当時は八千代大学）教授として転身されて教える立場になられましたが，それまでの23年間にはいろいろの思い出があります。

少々失礼な言い方かもしれませんが，なんといっても本の虫，本がなくては生きていけない方という感じでした。いつも書店のカタログ，書誌，索引類，新刊雑誌や自分の興味分野の新刊書を持ち歩き，国内外の出版・研究事情に目を光らせておられました。普段のアンテナのきかせようは普通ではありませんでした。アジ研を退職されてからも「あの本は注文してあるか」と電話がかかってくることがしばしばでした。資料収集とレファレンス・サービスをはじめとする各種の情報サービスは，中村さんの心のなかでいつも両者が同居しているという感じでした。本が到着するとその内容が気になってしかたがないから必ず手にとって内容をみる，ある本はあの研究者に重要な資料だと思われる

からときどきは本人にこちらから到着を知らせる，自分が知らない本を研究者が手にしていると気になってしかたがないから「その本をみせてください」と声をかけてしまう，というようなことがありました。普段はとてもシャイな方で静かにしておられますから，一見近づき難い感じを受けるのですが，本がお好きだから無意識のうちに行動が先に出てしまうのでしょう。

中村さんはレファレンス・サービスをどう展開するかについても，大いにエネルギーを注がれました。『資料月報』，『海外経済資料』，各種書誌・目録刊行など書誌活動にも熱心に取り組まれました。『資料月報』のなかに近着資料紹介というコーナーがあり，毎月新着資料のなかのめぼしいものを各人が読んで紹介するのですが，中村さんはどの資料を紹介するかを決めて地域担当者に渡されました。ひと時期は毎月新しい本を読んで短い近着資料紹介をやりました。若い時期に大変勉強になりました。

『海外経済資料』は海外の雑誌記事や出版物のなかから途上国の最近の重要問題に関する文献を翻訳紹介したものですが，これも中村さんが材料を選択・編集され，1964～1969年の期間に刊行されました。我々の下手な翻訳をまともな内容に編集して出版するのは大変だったろうな，と今にして思うことです。

図書館の初期からコンピュータ画面に移るまで，「選書カード」システムがありました。選書者，選書者が属する部（課）長，収集課主任，収集課課長，図書館長の承認印が必要で，最低二部用意され，一部は収集課の重複・所蔵調査用，もう一部は書店への注文書となるものでした。中村さんはこの「選書カード」に時間を惜しむかのようにタイプライターで打込んでおられました。この「選書カード」をみると明らかですが，資料入手の最終決定者は館長（当時は図書資料部長）です。この点も設立の初期からキチンと確立されていました。

情報サービスを確立していく過程では，1963年の参考課の発足から1978年の資料情報相談室の設立まで，中村さんがかかわってこられた役割が大きいと思います。外部利用者へのレファレンス・サービスは，アジ研が市谷に移転して収集・整理・参考の三課体制ができて以来増加する傾向が顕著でしたが，資料情報相談室ができて組織的対応が整いました。中村さんを中心に資料情報相談室に関する議論が行われたのを記憶しています。

話が前後しますが，1960年代中頃中村さんが参考課長をしておられた時代には勉強会が勤務時間内に行われ，いろいろなテーマについて勉強をしました。テーマはもっぱら中村さんが設定され指定文献も用意してくださいました。最近の国内外におけるレファレンス・サービスの動向や資料事情などに関するテーマで日本語や英文の参考文献を読みました。各国の全国書誌刊行事情について勉強したのを覚えています。またアメリカの議会図書館が中心になって1950年代半ばから開始された余剰農産物売却資金をもとにした世界各地での資料収集活動の状況なども勉強しました。このPL480（余剰農産物処理法）プロジェクトによる収集資料の内容は定期的に刊行されるリスト（Accessions List）によって知ることができましたが，途上国各地のフィールド・センターを経由して議会図書館やアメリカと一部カナダの大学図書館・研究図書館が入手している資料の内容は我々には衝撃的でした。その規模においても内容にお

いても，我々が日常的に収集している資料のレベルとは格段に違うものでした。出発点からして予算規模がまったく小さく，現地に常駐の収集オフィスもなく，現地からの資料を収集する立場のアジ研図書館はどう対抗してゆけばいいのか，勉強会で非常に考えさせられました。その後海外派遣員としてニューデリーに2年間滞在して収集にもあたりましたが，現地では彼らのシステムと経済力の違いをたびたび実感させられました。私は限られた予算を考えながら新刊書・古書を選ぶのですが，議会図書館のニューデリー・オフィスは新刊書については25部，古書についても時間をかけて選書するようなやり方はしないでゴソッと買い取るという具合で，悔しい思いをしたことがたびたびでした。

このように勉強会を通して欧米先進国やソ連などの図書館活動，資料所蔵状況，途上国関係資料の出版状況などを学びました。欧米・ソ連などの主要図書館に負けないレベルの資料センターをつくりあげたいという気概を中村さんから教えていただいたと思います。

中村さんについてはほんとうにいろいろな思い出があります。さきほど「本の虫」と失礼なことをいってしまいましたが，生真面目一本槍の堅苦しい方では決してなくて，本とクラシック音楽とビールがお好きな方でした。クラシック・コンサートにもよくでかけておられました。ビールのほうも大変お好きで宵の口にはアジ研周辺のあちこちに飲み友達の方々と出没しておられたようです。そのような個性を通じてアジ研図書館の特に収集と情報サービス活動に大きな足跡を残された方だと考えています。

V 『アジア経済資料月報』の刊行と専門書誌の編纂

――当初から図書館業務の柱として書誌活動が明確に位置づけられていたのですか。

松本 私と同期で入った人が何人もいたのですが，そのなかの，確か3人か4人が外国雑誌を全部みて，必要な記事をタイプライターでカードに打ち込む採録作業をしていました。これが1960年から8年間ほど刊行した『外国雑誌記事索引』（1960年7月～1967年3月，以後『アジア経済資料月報』（1967年4月～1998年3月）に統合）の作業です。そのグループのなかに，インド研究者になられた多田博一さんや投資法関係をやられた桜井雅夫さんらがおられました。この時すでに図書資料部で受け入れた資料リストを提供する『資料月報』（1959年11月～1967年3月，以後『アジア経済資料月報』に統合）を刊行していました。つまり資料情報を外部の図書館や研究機関や利用者に提供することを非常に意識的にやっていたということです。当時は，雑誌記事索引，ましてや洋雑誌の雑誌記事索引を編纂しているところはあまりなかったですから画期的なことで，そういう情報自体がものすごく新鮮でした。しかも研究者，企業，政府関係者にとっても，やはり非常に新鮮なものだったと思います。なんせ入ってきた雑誌に全部目を通して索引化するというシステムです。やはりそう暇じゃないのです。タイプライターの音が響いて忙しい雰囲気でした。

――その当時，中国や東南アジア，イスラム関

係について「総合目録」の編纂事業をかなり積極的にやられていますが，書誌編纂は図書資料部のプロジェクト事業のようなものだったのですか。資料の収集，整理，閲覧サービスといった図書館の日常的な業務とどう分けて事業をやられていたのですか。

松本　書誌編纂は当初から図書資料部の事業として企画され実施されたと理解しています。このような事業はどうしても中心に専任の方がいて，その方を随時サポートするためのスタッフが周辺にいるという体制が必要です。つまり専任でなければやれない部分とそうでない部分とがあるわけです。専任にはやはり知識と能力のある方が必要ですし，サポートする部分は図書資料部内の職員やアルバイトのような臨時的な人によって行われました。いろいろな書誌活動のなかで，いくつも総合目録が編纂・出版されました。特に，『旧植民地関係機関刊行物総合目録』（1973～1981年，全5巻）の編纂の場合は，非常に大きなプロジェクトで長期にわたるものでした。八巻佳子さんが編集担当者として中心におられ，採録作業などを我々がお手伝いする，カードはマイクロ室の人が参加して撮影するというような形でした。

この総合目録のためのもとになる情報を集めるのは，日本各地の大学図書館です。なかでも旧帝大とか，長崎大，大分大，山口大，滋賀大，福島大といった旧高等商業専門学校の図書館でカードからの採録作業のときに，我々も動員されるわけです。図書館の職員3～4人が選ばれ1週間ぐらい出張して，毎日目録カードを調べて，旧植民地関係資料のカードを選び出し，マイクロフィルムの専門家がカメラで撮影していく，という作業をずいぶんやりました。そのお手伝いで，いろいろな図書館を訪問して目録カードを実際にみていくわけですから，その図書館の蔵書構成や特徴がだいたいわかってくる。これは非常に勉強になりましたし，図書館の人との人脈もつくれました。この事業がうまくいった要因のひとつには，マイクロ撮影や編纂のための実務的専任スタッフがきちんといたことも大きいです。こういった事業は，組織的なコーディネーションがうまく行われれば成功すると思います。総合目録編纂事業を通じて，八巻佳子さん，井村哲郎さんといった旧植民地関係資料の専門家が育ったことはアジ研図書館にとって非常に意味深いことだと思います。

『現代中国関係中国語文献総合目録』（1967～1970年，全10冊）の場合は，中央大学の江副敏生先生のお弟子さんたちが中心になって行われました。図書資料部では松谷賢次郎さんが事務方としてとりまとめをやられました。それから，『タイ語文献総合目録』（1972年，上・下巻）は東京外国語大学の田中忠治先生が中心になって編集されました。いろいろな総合目録をつくっていますが，それぞれ編纂体制が違っていたと思います。

Ⅵ　1970年代後半
――レファレンス・サービスの拡充と書誌編纂――

――さて，大規模な書誌編纂事業が終わった後の1970年代後半以降のお話に移らせていただきます。雑誌・新聞の価格高騰などで資料購入費がかなり逼迫してきたり，書庫スペースが限界になってきましたね。雑誌の講読をかなりキャンセルせざるをえなかったり，経費節減の

ために『アジア経済資料月報』が活版印刷から手書きやタイプでつくった目録カードを版下にした写真製版になったりと。その一方で，アジアの経済成長が注目されてきて資料のニーズが高まってきましたね。

松本　確かに，1960年代，1970年代の半ばぐらいまでは，外国からいろいろな資料を手に入れて，それを使えるようにして，皆さんに情報を流していれば，そのこと自体が非常に新鮮で意味があったと思います。資料もなかなか手に入らないという時代ですから。それ相応に役に立つ面というのはかなり明確だったのです。けれども，だんだん日本の経済力がついてきて，さまざまな機関がいろいろな形で資料を集めるようになってくる。そうすると，全体としてアジ研が独自にもっていた特色がだんだん薄れてくるということもあったと思いますが，途上国に関しての情報ニーズは高くなってきたので，レファレンスなどが増えてきた時期でもあったのです。日本の図書館全体が情報サービスの必要性を認識してきて，レファレンス・サービスがだんだんとさかんになりました。利用する側にもレファレンス・サービスというのはけっこう使えるのだという認識が広まってきた時期だったかもしれません。

当時は電話交換手さんが代表電話をいったん受けて各部署に回していたのですが，研究所に問い合わせが増えてきて，お役所的な電話のたらい回しに対する苦情もあって，やはり総合的な窓口が必要だということになりました。それで，1977年に図書館に研究所のレファレンスの窓口として資料情報相談室を置くことになったのです。図書資料部に問い合わせもあるし，研究者に答えてもらう必要がある場合には，人的な振り分けも資料情報相談室でやることになりました。相談室は管理職を含めて3人体制でしたが，1980年代に入ると徐々に問い合わせが多くなり，そして東アジアの急成長とともに資料のニーズが多くなりました。28席あった閲覧室も満席となり予約待ちがでるほどでしたね。レファレンス担当の一人が午後に閲覧当番で席をはずしたりすると，問い合わせの電話に張りつきっぱなしになったり，同時に2，3本電話がなっているようなこともありました。担当者はくたくたになり，2～3年経つと神経がほんとうに疲れてしまう激務であることが明らかになりました。ある一定期間を過ぎると充電のための配置転換をする必要があることがわかりました。これも体験的に理解できたことでした。

ご指摘の予算逼迫による問題が深刻になり，雑誌や新聞の削減が避けられない時期がやってきました。外部からの問い合わせは増えているのに，肝心の情報源は減らさざるをえないというので，数年間気が滅入るような部内の検討会議が続きました。どの雑誌・新聞の予約を切れば，どの研究者に影響が及ぶかということがわかりますから，その方々の顔がチラチラと討議の途中で浮かんでくるわけです。ほんとうに辛い思いをしました。

スペース問題はいつもいつも頭痛の種でした。市谷時代には書庫の収容能力一杯の状況になり，やむをえず横浜の貸書庫を利用して蔵書の一部を預けて，必要な場合は宅配便で取り寄せるという事態になりました。宅配便で取り寄せると，どんなに急いでも翌日にならないと資料をみることができません。利用者にはほんとうに迷惑をかけました。それにこのようなシステムでは，

毎年新たに預けないとスペースのやりくりがつきません。ほんとうに余計なといいたい仕事が増えて非効率な図書館運営になりました。幕張に移転してこの問題には終止符がうたれたのですが，非生産的な問題だったなと思います。

――1981年から『発展途上地域日本語文献目録』が刊行されましたね。

松本　アメリカでは*Bibliography of Asian Studies*が1950年代，1960年代からあって，ずっと雑誌の特集号の形で出ていたのが独立して年刊で出るようになった。雑誌記事と単行書と分けて，国別・主題別書誌として編纂されていました。また，当時ソ連では，途上国研究にずいぶん力を入れていて，やはり年刊のアジア，アフリカ，ラテンアメリカ研究の書誌を出していたのです。名前は途中でちょっと変わりましたけれど，『アジア・アフリカ・オセアニア書誌』（*Литература о странах Азии, Африки и Океании*）が出版されていて，それを僕らもみて，やはり当時のソ連のなかで行われている途上国研究が，かなり早いスピードでわかる。この2つが非常に目立ちました。最新の出版状況について，国単位，主題単位で，きちっとある一定の間隔で情報を届ける必要があるということを感じました。

これはかなり大変なことで，ずいぶん部内で議論をしました。1976年から『アジア経済資料月報』で，日本語の雑誌索引を年1回特集号『邦文雑誌記事索引』というタイトルで出していたのですが，これに単行書を加えて独立させる案が出てきた。これが1981年からはじまった『発展途上地域日本語文献目録』です。アメリカとソ連がこういうことをすでにはじめているというので，日本も追いかけなくてはいけないというのが動機でした。日本の既存の文献目録では，京都大学人文科学研究所の『東洋学文献類目』や，東方学会の『東方学関係著書論文目録』が年刊としてありましたが，どちらも歴史が中心なのです。それから，経済関係は『経済学文献季報』があったのですが，やはり「経済学」ですから，途上国研究のなかの社会，政治，法律といった分野は採録対象になっていません。また『史学雑誌』で毎年1回地域別の年間研究回顧を行っていましたが，歴史学が中心でしたし書誌としては他の分野の資料も我々には必要でした。

この編纂は図書資料部のスタッフだけでやりました。図書資料部のなかで担当者を決めて，大きな地域に分けてやることにしました。これを毎年やるようになって，かなり業務がきつくなりましたけれど，利点は1年に1回，必ず前年，ないしはその前々年度に刊行された雑誌記事と単行書に関する書誌情報が，研究者や学生，そして関心のある方に届けられるということ。そして，我々にとっての副産物としては，やはり毎年1回，回顧するわけですから，どうしても入手漏れの資料があるのですが，この編纂作業を通じてそれを集めることができるわけです。それから，我々が集めている，図書館で入れている雑誌で，最近創刊された非常に大事なものが，図書館に入っていないということもわかってくる，最近この雑誌の途上国関係の論文が増えているなとか，この大学紀要はいいなということもわかる。そういう資料の入手，選択の道具としても非常に役に立ったと思います。

地域担当専門の図書館員を養成していく場合

には，ちょっとしんどい作業ですが，こういう作業がどこかにないと，どうしても日常業務だけで終わってしまうところがあります。たまたま私が参考課長になった時期からこの仕事をやったのですが，私の頭のなかでは年に１度，自分の仕事の中身を回顧するようなチャンスがあったほうがいいのではないかという気持ちがありました。

――1982年に日本の歴史教科書がかなり改訂されたために，近隣のアジア諸国で反日運動が起こり，特に東アジアの新聞などを通じてかなり批判的に報道された，いわゆる「歴史教科書問題」が起こりました。あのとき，急遽図書資料部では，この問題に関して『アジア諸国の主要新聞に現われた「教科書問題」記事索引』（1982年）を編纂されましたね。勇気が要った企画だったと思いますし，また，貴重なものだったと改めて今思うのですが，いかがでしたか。

松本　1982年の７～９月という時期を選んで『新聞記事索引』をつくったのですけれども，ちょうどこの時期に，日本のアジアに対する「侵略」を「進出」と書き改めるとか，歴史教科書のなかでかなり明確な問題が出てきた。それに対して，周辺諸国でものすごい反応が起きたのです。東南アジア各国，最初に反応したのはシンガポールあたりでしたか。東南アジアあたりで，もう非常に厳しい反応が出てきた。それから，やはりお隣の韓国，中国，台湾あたりでもそうです。ほんとうになにか突然火がついたという感じになったのです。アジ研は発足以来，現地の新聞が情報源として非常に大事だというので，図書館は新聞をできるだけ多く集めていたのです。予算の相当大きな割合を新聞に割いて，しかもエアメールで取り寄せていました。さらにそれをマイクロフィルムにして保存する。現地のいろいろな情報を生で知るには，新聞が最適だということもあって，やってきたわけです。我々が新聞をみていると，各国でものすごい反応が出てきているわけです。

ところが，日本のマスコミは意外と反応が鈍いのです。日本と東南アジア，ないしはアジア諸国との間のギャップがかなりありました。そのうちに，日本の新聞も報道しはじめたわけですが。図書資料部参考課のなかで，このことがやはり問題になった。アジ研がアジア各国の最新の新聞をもっているのだから，新聞記事を紹介することで，このギャップの大きさがわかるのではないかという議論になってきて，「じゃあ，ちょっと忙しいけれども，がんばってやろうか」ということになったのです。参考課以外にいる部内の地域担当者の協力もお願いして，各人に新聞を割り当てて，英文，東南アジアの諸言語，ハングルや中国語などの記事をピックアップして，タイプで原稿をつくり，タイプ作業が困難な言語の場合は手書きのカードをつくってもらったのです。それを編集して，『アジア経済資料月報』の特集号（1982年，11・12月号）として出したのです。

そうしたら，今度は逆にものすごい反響がありました。これをほしいという人がかなり出てきて，『資料月報』が売り切れになってしまった。それでは本も出そうということで，出版会から定価800円で出しました。130ページで手書きのデータも載っている印刷物です。これが出たときには全国紙でも紹介され，新聞記事の

クリッピング・ファイルをみにくる人が大勢いました。「よくやってくれた」という人もいましたが，批判的な意見もありました。

アジ研図書館の大きな役割のひとつは，国外の情報，なかでも途上国現地の情報をできるかぎり敏感にとらえて，すばやく利用者に提供することにあると思います。情報ギャップをできるだけ埋めてゆく，という意味があったのではないでしょうか。

――雑誌記事索引を取るために雑誌はみていたと思うのですけれども，図書館員は新聞記事にもよく目を通していたのですか。

松本　大体エアメールの新聞が対象ですけれど，新聞が届くと，マイクロ室の担当者が毎日受け入れて，それをすぐ閲覧室の新聞棚に入れるわけです。なにか起きると研究者だけでなく図書館の皆もぱっと新聞をみるわけです。誰でも読めるように新聞を非常にオープンな形にしてありました。今のようにインターネットで新聞を読めない時代なので，エアメールで届く現地の新聞が情報源としてもっている役割は非常に大きかったのです。戦争やクーデタが起こると，資料部内の担当者も研究部門の担当者もまず現地新聞をみるために閲覧室に行きました。研究所内の人だけでなく，研究者や調査マンやマスコミ関係者などが熱心に新聞をみていました。

Ⅶ　図書館の新たな時代
――カード目録からOPACへ――

――1980年代以降の急速なOA化と1990年以降のIT化によって，図書館も大きく変わりました。資料へのアクセス方法がカード目録からデータベース検索であるOPACへと大きく変化しましたね。

松本　私はやはりカード目録時代から，データベース時代へという時期には，いわゆる「移行期の問題」があったと思います。そのころアジ研のなかの研究者だけではなくて，所外の利用者も含めて，50代，60代でもまだ第一線で研究をやっているという人たちが非常に戸惑ったのではないかと思います。新しい機器やシステムが入ってくる際には，必ず個人によって，または世代によって対応に大きな差異が出てきます。新しい事態に適応するのに困っている人になんらかの形で印刷メディアによる情報検索手段を，たとえそれがあまり長くない期間のものとわかっていても，提供する必要があったと思います。これはたぶん10年ないしは15年くらいの移行期と考えられます。この対応がアジ研図書館の場合にはあまり親切ではなかったなと思うのです。これは日本の図書館界に共通する問題でもあります。生涯学習の必要性を叫びながら，コンピュータ時代に取り残された世代や個人向けにどれだけサービスしてきたのでしょう。きつい言葉ですが，サービスを切り捨てたという面があるように思います。

――確かにそうかもしれませんね。ただ，実際には，カード目録とデータベース化を並行してやっていた時期が半年ぐらいあったのですが，その間，滞貨本がかなり発生しどうにもならない状態が続いてしまい，データベースに一本化せざるをえませんでした。1995～1996年頃だったと思います。

松本　それと絡んで，『資料月報』の廃刊が残念でした。やはり，『資料月報』をなくしてしまうと，もうほんとうに図書館側からの情報発信手段を失ってしまうのです。その当時は印刷媒体とインターネットの交代期でしたから，非常に難しい問題だったと思うのですが。

私は古い，印刷メディアに馴染んできた世代のひとりですから，やはり具体的に手にとって目録，書誌，索引類をみたいという感じがあります。そうすることで，全体としてのイメージがつかめる。特定地域や特定主題に関する資料，ある特定時期の主題に関する資料などを探すときには，印刷媒体のほうが便利だと思うことがあります。国立国会図書館のオンライン上のデータベースや国立情報学研究所のWebcatは膨大な資料のなかから特定資料の存在を探すのには大変便利な道具ですので，その特徴を生かしてますます内容を充実させていただきたいのですが，先にいったような特殊な主題に関する資料を探索する場合には，ほんとうに十分に探索することができたかどうか不安に感じます。論文を書こうとして専門的な情報を積み重ねていく必要があるような方の場合，やはりネット上の情報だけに頼っていては，不安になってくるのではないでしょうか。

大きな流れとしては，グーグルが欧文資料の全文を読めるようなサービスをやるということになるでしょう。日本語資料に関しては国会図書館が「近代デジタルライブラリー」を進めていて，古い資料をネット上で読めるようになってきました。自分で本を探して手にとって確かめなくても読めてしまう。ネット上のデータからコピーを取って読んですます，ということができる。図書館に行かなくても，かなり多くの貴重書を読むことができるという状況が現実になりました。この流れは図書館の仕事の仕方にどういう影響を与えるのか，図書館の存続そのものにどう影響を与えるのか，考えてしまいます。ただ一方で，さきほども提起したように，主題分野別，地域別，年代別，刊行時期別の書誌類については，冊子体のほうが実際に役に立つことがあると私は思います。そしてそのような書誌類とオリジナル文献をきちんとキープしている図書館の役割は残ると期待しています。

――テーマ別といった専門書誌ということですか。

松本　そうです。やはりあるテーマに沿った書誌の利点は，資料群の全体像をつかむとか，今まで気がつかなかったものを偶然ピックアップできるとか，いろいろな面があると思うのです。そういうのをまとめるところに図書館員の役割があるのではないかと。今後，デジタルライブラリーで全部読めます，グーグルに全部頼りますということになってきても，ある特定のテーマに関する多数の資料の全体像を示す，書誌や目録類は依然として必要なのではないでしょうか。

――最近の図書館は，なんとか利用者を繋ぎとめるために，「場」としての図書館，勉強したり研究したりするための空間の提供をPRしていこうという動きがあります。確かに図書館に来て資料に手で触れるということも重要ですよね。

松本　ええ，そういう大切な面もあると思いま

す。公共図書館や学校図書館などの場合は特にそのことがいえると思います。けれども究極の価値はコレクションの中身と図書館員の能力だと思います。途上国問題に関してアカデミックな専門分野と現実の政治や経済などの現状分析とにかかわっている資料を追求する専門図書館としてのアジ研図書館がもっているひとつの特徴は，各国の現地資料，各種言語資料など，国内外で刊行された多様な資料を手にとってみることができるということでしょう。

アジ研の研究部門と図書館が同居していることも大きな利点です。この条件を生かすために，研究部門との交流をやる。それから研究会なり，研究のためにやってくる内外の専門家たちと図書館が交流することはやはり出発点だと思います。研究部門と図書館が，協力関係をいろいろな形でつくることが大事だと思います。アジ研ほど研究者の資料に対する需要をキャッチしやすい場所はないです。一般的にみて大学では図書館員と教官の関係は，アジ研ほど緊密ではないように思います。もうひとつの利点は，途上国からの客員研究員や短期訪問者が数多く来てくれますので，アジ研図書館が国際交流と情報交換の場となっていることです。日本が途上国に向けている知的交流の場という面を大切に維持することが必要だと思います。

それと，地域研究という世界で，アジ研が今後どういう役割を果たしていくかということと図書館の将来は関係していると思います。地域研究そのものの将来もふくめて，研究部門の人達と意見交換し，協力関係を緊密にしてゆくことができれば，どのような資料を収集すればよいか，どのような地域担当ライブラリアンがのぞましいかなどについての展望がひらけてくるのではないでしょうか。

Ⅷ　南アジア地域専門のライブラリアンとして
――アジ研退職後の活動――

――松本さんはアジ研を定年退職された後，東京外語大の，「21世紀COE『史資料ハブ地域文化研究拠点』」プロジェクトにアドバイザーとして参加されていました。アジ研図書館の仕事の延長線上にあるような仕事をされていたのですか。

松本　東外大のプロジェクトに5年いましたけれど，このプロジェクトのひとつの特徴は現地の資料を収集することでした。それから現地に関して先進国で出た資料，特にマイクロフィッシュ（シート状のマイクロフィルム）や地図を重点的に買いました。アジ研がこれまでやってきたようなことと，似たようなことをやりました。コレクションを強化するという点では，かなり意味があったと思います。東外大の特徴は言語に堪能な方が多いところです。いろいろな言語の資料を集めて，それがすんなり図書館に収まるというところは他ではなかなかみられないでしょう。たとえば南アジアにしても英語の資料はともかくとして，インドのいろんな諸言語による資料のコレクションについては，日本国内では長期的にみて東外大図書館にセンターとしての機能を位置づけるのが合理的だと思います。やはり現地語資料というのは非常に大事です。現地語資料については，一貫して追いかけていく図書館が日本国内で必要だと思います。

このプロジェクトでいくつかの仕事をやらせ

ていただきましたが，ひとつは国内で未発掘のインド関係の資料を発掘して今後のインド研究のために利用できるようにしようということで，それまで完全なバックナンバーがみつけられなかった日印協会の『会報』を，創刊号を含めた欠号を発見してなんとか揃いのものを作り上げることができたこと。それと第二次大戦中にインドの収容所に抑留された一般市民の人々によって戦後つくられた「インドワラ会」関係の会誌や会員が残された収容所時代に描かれた絵などの資料を整理して，今後の利用が可能になるようにしたことは印象に残る仕事でした。それとこのプロジェクトの仕事として『インド書誌』を編纂・刊行できたことです。

――松本さんが編纂された『インド書誌――明治初期～2000年刊行邦文単行書――』についてお話いただけますか。確か，アジ研にいらっしゃった時からはじめられていたかと思いますが，かなり大変な作業だったのではないですか。

松本　この書誌は，いつか印刷物として刊行してインド関係者の利用に供したいと思い，アジ研時代から書誌データを集めておいたものを，一冊に編纂したものです。アジ研で働いているときはなかなか時間がとれなくて，他所の図書館に行って未発見の資料を探索するとか，現物を確かめたりすることができませんでした。定年退職してやっと時間が確保できて，作業を開始できる状態になりました。ところが今度は出版してくれそうなところがわからない。そうこうするうちにプロジェクトの出版計画の一部に入れていただくことができ，刊行にこぎつけました。

日本とインドの直接の付き合いは明治になってからはじまりますが，間接的な関係は仏教伝来以来古い時代から続いています。日本ではインドに興味をもっている人の数は多いですし，これからも増えるだろうと思います。インドについてなにか調査しようとか，研究しようとする人々に既存の史資料探索のための道具として使っていただければ，と考えています。その後に発見した文献もかなりありますので，いつか改定版を出したいと思います。それからこの書誌に収録したのは単行書ですから，雑誌記事の問題が残っています。明治期以来の主要逐次刊行物に掲載されたインドに関する記事の索引をつくるという課題があるのですが，どのくらいの時間と労力を要するかわかりません。私に残された時間と体力を考えると個人の仕事としてはもう無理でしょう。どなたかやってみようという方はおられないでしょうか。

Ⅸ　アジ研図書館へのメッセージ

――長時間にわたりいろいろなお話をいただき，たいへんありがとうございました。これまでの松本さんのお話から，現在のアジ研図書館の活動，人材育成方針はすでに創設期に骨格が確立されていてほぼそのレールに乗ってきたということがわかりました。しかしながら，アジ研が幕張に移転し，そして21世紀を迎えて，急速なウェブの普及やデジタル化によって，利用者のニーズや図書館の資料サービスのあり方も激変しています。一般に「図書館の冬の時代」といわれていますが，アジ研図書館もその例外ではありません。最後に，これからのアジ研図書館に対する何かアドバイスをいただけますで

しょうか。

松本　ほんとうによほど考えていかないと，時代の波に押し流されることになりかねないと思います。それは他の図書館でも同様で，そういう危険な分かれ目みたいなところに図書館全体として立っていると思います。グーグルが本をネット上で読ませる，国会図書館が「近代デジタルライブラリー」で多くの本を読めるようにするという時代の流れは加速されていくと思います。そういう大きな変動のなかで，途上国各国の資料状況や出版状況は決して一様ではなく，また国別にそれぞれの形とスピードで変化していると思います。先進国の状況だけから判断すると，大切な資料を見落とし，入手に失敗する可能性があります。国別にその状況に応じて，注意深く柔軟かつ継続的に対応する必要があります。

アジ研図書館が日本における途上国に関する資料センターであるという原点に立ち返って，収集活動に力を注ぎより一層充実したコレクションを構築し，それをもとに書誌活動や出版活動に力を入れて情報発信していくことが大切だと思います。アジ研図書館は日本が途上国の現状と将来を知るためのアンテナのようなものです。そこに集まる情報と知識を日本の社会に提供し，学術の国際交流にも寄与するという場だと思います。そのような大切な場を確保して発展させてゆくのはほんとうに意味のあることだと思います。

そのためには地域や主題を勉強した図書館専門家の育成が肝心だろうと思います。途上国研究図書館のなかの専門家は，地域や主題に関して資料面で追いかけて，社会が必要とする資料と情報を提供できるだけの能力をもっていることが期待されます。そうした人材を育てるにはどう考えても最低10年位はかかるでしょう。大学や大学院を出てすぐの人に専門家としての仕事を期待するのは，要求するほうが，私はちょっとおかしいと思います（笑）。アジ研の海外派遣期間は2年間ですが，やはりその位は現地経験が必要だと考えます。その間に知った現地の図書館員，研究者，書店の人々との人脈が後で生きてくるのではないでしょうか。その後勉強を続けてやっと一人前になるという感じです。時代が変わったから，最近では急に人が短期間で早く育つということはありますか。やはり人材育成には時間がかかるし，研究所外にできあがった人材がいて簡単に採用できるという状況でもないと思います。

私は印刷メディアは生き残ると思うし，それに期待もしているわけです。インターネット時代だからといって，全部情報のソースをインターネットに頼らないように（笑）。こつこつと大事な印刷メディアの資料も集める努力をしないといけないのではないかと思います。そしてまたインターネットの世界にも通じていて，時代の変化にキャッチアップできる能力も必要です。若い貴方たちはかつての我々にくらべてもっと大変なことを要求されています。

一般論として図書館の専門家のイメージとしてはいろいろなタイプの専門家がありえます。資料の収集，整理，情報サービス，書誌活動などの分野でそれぞれの専門家がありうるのですが，アジ研図書館の場合はそれに地域と言語の問題が加わります。ですから要求される能力がかなり高度になります。これからのことを考えると，基本的には図書館情報学または地域研

究・言語のバックグラウンドをもっている人を採用して訓練・育成をする必要があると思います。そのような専門家が成長してくれば，その人たちを中心としたラインをつくりあげて，図書館の経営を行っていくことが必要でしょう。図書館界でも十分に情報を発信し，他の図書館と協力しながら活動していかなければなりません。グーテンベルグ以来といわれる情報世界の大激変時代には，図書館界の動きに精通したリーダーとそれを支える専門家の集団が絶対に必要です。大荒れの大海を乗りきるには有能な船長と乗組員が必要です。

それともうひとつ，私が改めて感ずるのは，途上国のいろいろな地域や主題の情報を求めるときに，アーカイブズ（公文書館）にある情報源に図書館員が目を向ける必要があると思います。図書館員とアーキビストとの協力の場をできるだけつくって，良好な関係を維持していくことが大事だと思います。なんで私がそんなことを考えるようになったかというと，イギリスに海外調査員として2年間滞在しました。当時India Office Libraryと呼ばれていた図書館がありました。今はブリティッシュ・ライブラリーの一部になって，名前も変わりましたけれども，この図書館は世界でも非常に珍しい図書館で，アーカイブズとライブラリーが一緒になっているのです。イギリス統治時代のインド，南アジアに関する資料だったら，誰がどう逆立ちしたってIndia Office Libraryにはかなわないというところです。そこでは利用者が両方の資料をうまく使っているのです。ああ，こういうやり方というのはすごいなという感じでした。あれは非常に役に立ちました。専門家のアーキビストたちは，いろいろなことをほんとうによく知っていました。

日本の場合，1970年代に国立公文書館ができたのですから，国際的にみてもアーカイブズの発達が非常に後れています。アジア歴史資料センターが，もっぱらネット上でアジアに関する公文書の情報を提供していますけれども，これは非常に使えるものです。やはり，そういう人たちとの交流をこれからどんどんやっていくべきです。特にアジア関係・途上国関係のアーカイブズに眠っている資料を，我々もきちんと意識して利用することをやったら，ずいぶん活動の幅が広くなるのではないかと思います。もうひとつの豊かな情報の鉱脈との連携もおもしろいのではないでしょうか。

最後にアジ研図書館に期待したいことを申し上げると，資料収集，書誌類の編纂と出版，国内外の研究者や図書館との交流などの活動を発展させ，そのなかで図書館がもっている資料や知識・ノウハウを社会に発信し寄与していこうという基本的な姿勢を日常業務のなかで生かしていただきたいと思っています。そのような努力を通してアジ研図書館が将来にわたって存続・発展してゆくことを願っています。